

審査委員会審査報告書

2021年 1月 5日

審査委員会審査委員					
主 査	町 博光				
審査委員	富永一登				
審査委員	古瀬雅義				
審査委員	灰谷謙二				
学位申請者氏名	平澤洋一				
論文題目	雪月花のクオリア				
論文審査の結果	<input checked="" type="checkbox"/> 合格	・ 不合格	試験の結果	<input checked="" type="checkbox"/> 合格	・ 不合格
論文内容の要旨（400字程度）					
<p>従来の語彙研究は、語彙を支える論理的意味、文法的意味、歴史的な意味の面から語彙体系や意味体系を明らかにしようと試みてきた。ただ情感的意味（感情に訴える意味）の面からはこれまでさほど研究がなされてこなかった。</p> <p>『雪月花のクオリア』は、この感覚や情感に関与するクオリア（質感）がどのように形成されてきたのかを明らかにしようと試みた、意欲的な研究である。</p> <p>研究方法としては、『古事記』『万葉集』『源氏物語』また『枕草子』などの『雪月花』に関する表現を収集し、『雪月花』のそれぞれの表現を、A「説明表現による質感」、B「情感表現による質感」、C「強調表現による質感」、D「修辞法（レトリック）的表現による質感」に分けて、それらの表現を数値化して解析し、個別の雪月花同士の相関性や表現体系を明らかにしようとしたものである。</p>					
論文審査の結果の要旨（1,500字程度）					
<p>クオリアを数値で記述できるのか、言語学でそれができるのか、そんな疑問と興味から本研究は始められた。映像表現（映画やコミック）では人や自然が生き生きと描かれ、人々に感動を与え、それについての映像理論も存在するのに、言語学（日本語学）では、この情感的意味に力点を置いた語彙分析はほとんど見当たらない。情感的意味を扱うと、論理的な研究ではないとの認識が研究者にあったと思われる。</p>					

本論文は全11章から構成されている。「第1章 本研究の目的と方法」「第2章 日本文化の基層」では、日本文化がどのように成立したか、その成立の経緯が日本人のクオリアにどのような影響を与えているかについて述べる。「第3章 クオリアを変化させる要因」では、文構造とクオリアの相関について述べる。「第4章 花による人物表現」「第5章 雪のクオリア」「第6章 月のクオリア」「第7章 花のクオリア」は、『古事記』『万葉集』『源氏物語』『枕草子』から収集したそれぞれの表現がどのように受容されているかを詳細に検討し、それぞれの表現に質感的な点数を与えている。「第8章 雪の多変量解析」「第9章 月の多変量解析」「第10章 花の多変量解析」では、収集されたすべての雪・月・花の評価をもとに多変量解析をおこない、上代から中古文学の中でこれらがどのように認知されているかを分析する。「第11章 雨のクオリア」は、『古事記』『万葉集』をとりあげ、両者の雨のクオリアを比較している。

論文の中心的な部分をなすと考えられる第5章から第7章を要約する。雪と月は『万葉集』と『源氏物語』でその表現が急増し、『枕草子』では雪が53例、月が31例見られる。花はこの時代に種類と表現が目立って多様化している。花についての表現度を見ていくと、プラスの花の表現は、『古事記』では橘・椿・蓮の花が「プラス3」、『万葉集』では優曇華の花が「プラス10」、『源氏物語』では藤の花が「プラス16」、『枕草子』では桜が「プラス13」であった。いっぽう、マイナスの花の表現は『古事記』では桜が「マイナス1」、『万葉集』では梅が「マイナス5」、『源氏物語』では朝顔が「マイナス6」、『枕草子』では「しぼんだ桜」が「マイナス9」であった。現在のわれわれの質感とは相当に異なっていることがわかる。

このような分析法で、中世、近世、近代さらに現代にいたる文学作品を帰納法的に扱うと、日本文学における雪・月・花のクオリアが把握できることになると思う。

以上のことから、当該論文は、博士(文学)の授与に値する優れた研究だと評価される。

試験(試問)の結果の要旨(400字程度)

各審査員と申請者との間で以下のような質疑がなされた。

- 1) クオリアの意味が漠然としている。
- 2) 各表現の評価は個人的なものであり、客観的な物差しはないのか。
- 3) 『枕草子』や『源氏物語』は作者の質感であり、時代的な質感とは言えないのでは。

申請者からは以下のような回答があった。クオリアは脳科学や心理学の分野ではすでに使われている用語である。評価に関しては個人の主観的な評価から客観的な評価を目指している。このような作業を積み重ねることで、時代的な質感の把握に努めたい。

なお外国語(英語)の試問も実施し、合格の判定であった。

注) 記載欄については、必要に応じて追加のこと。